

死からもどった人たちは みな
おなじように待っている
そして北から来たもの全てが
太陽を覆い隠すだろう

いったい何をしたいの
それは運命だ
応答せよ雌豚

突撃ラッパが なりひびく

ALLÔ LA TRUIE

見張りはながいぞ 歩哨たち
見張りはながいぞ 歩哨たち
そして呼ばれて殴られる



おだやかなる
苦行修道士

歩哨たちの長い見張り時間 歩哨たちのとても長い見張り時間
応答せよ雌豚

あてた。はまっているのかどうか。

SP
SP

硝煙のなか、カノン砲を打ちながら戦うアポリネール（彼は砲兵だった）。煙が目にしみて涙でぐしょぐしょになりながらも弾を打ち続けるというリアルな戦闘風景を描いているが、どこかコミカルだ。「パン パン パン／ベリュック ベリュック」と鳴るカノン砲の音から、まぬけなカツラをかぶった大砲を思い浮かべている（仏語でPurqueはカツラの意）。一節目の「Case d'Armons」は「武器箱（馬具庫の訳もあり）」だが、1915年に先行してつくられた手書きの詩集のタイトルでもある。21編の詩が収められているが、このときの詩を入れようかと考えを巡らせていたのではないかと想像し、二重に意味を重ねられるように訳さずに仏語のまま使った。SPは消防隊のこと。文字はオリジナルからの引用。

照準
VISÉE

前詩「SP」はルネ・ベルティエ軍曹に、本詩はその夫人に捧げられている。初刊本では見開きに配置されているが、ここでは掲載順を守った結果、表裏になった。前述の『Case d'Armons』にもこの2点は収録されている（ページは離れている）。ルネ・ベルティエは文芸雑誌「SIC」（8-10号、1916）でアポリネールにインタビューしている人物と同名だが、関係あるのかどうかはわからない。本当の上官なのかかもしれない。文字でつくられた線は機関銃の弾の軌跡か。楽器を奏できるようにして撃ちまくる詩人は、珍しく「平和戦争 禁欲 孤独」と愚直に言葉を並べている。戦場の音が聞こえるようだ。

まるで蟬のように
AUSSI BIEN QUE LES CIGALES

暗喩の塊のような詩である。まず1行目から引っかかる。南ってどこだ？ この場合、南方の戦地と考えるのが普通だろう。前線に立つ前、アポリネールは南仏のニームに駐留していたはずだ。そのころに書いたものなのかもしれない。フランスでは蟬は南仏にしかない。しかも南仏で蟬は幸福のシンボルで、忍耐強い太陽の申し子とされている。「蟬」を「幸福」と読み替えると、なんとなく詩の意味は理解できる。「boire」を直訳で「飲む」としたら言葉が繋がらず、蟬なの

で「樹液を吸う」とした。酒を飲むニュアンスも捨てきれなかったが、迷った末、幸福の蟬に頼ることにした。

耳につめた綿
DU COTON DANS LES OREILLES

アポリネールは最初砲兵隊に入隊したが、志願して前線の歩兵になっている。前線に行く方が出世が早いという理由からだが、歩兵時代の詩には暗く沈んだものが多い。この詩には、歩兵になったばかりのことがうたわれている。繰り返し使われる「応答せよ雌豚」というフレーズは「Allô la truie」のほぼ直訳。「Allô la truie」は、カリグラムのなかにも時折出てくる“音を言葉として聞く”一種の言葉遊びで、ここでは突撃ラッパの音をこのように聞いている。仏語ママで残すかどうか迷ったが、ばかばかしい言葉の意味も捨てがたく日本語訳をとった。この詩は自由詩型に造形詩を加えたもので、のちのダダ詩などに与えた影響をみることができる。5ページ目の雨のシーンはどうしても仏語に歯が立たず、英訳から起こしたものに手を加えた。最終ページの小さな造形部分「Périscope」は地名だと思うのだが特定できなかった。しかし、大砲や機関銃の音には抵抗ないようだったアポリネールも、ラッパの甲高い音には閉口したようだ。途中、何かの暗喩と思われる鯨や象といった大型動物が唐突に出てくるが、最後はシラミとの戦いでユーモラスに結んでいる。

味わいの風
ÉVENTAIL DES SAVEURS

造形詩を翻訳していくなかで、ひとつの言葉で全体が一気に開けていくことがあった。ここでは「versicolores」がそれにあたる。辞書を引くと「色合いが変化する、玉虫色、多色の」とある。そこで「lacs = 湖」と合わせて「色とりどりに輝く湖」としたのだが、何か違う。パズルのピースのかたちが微妙に合わない感じである。何度目かのトライのときに、「ilis versicolor」で「アヤメ」の意味だと知り、アヤメが水辺に咲くこともわかった。しかもアヤメ（アイリス）はフランスの国花である。これだ！ 湖畔一面に咲く青紫のアヤメの花に吹くそよ風。外国人として志願してまでフランス軍に従軍したアポリネールの心象風景のように思えた。

（永原）